



日本植物病理学会ニュース 第85号

(2019年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成30年度の日本植物病理学会北海道部会は10月18日～19日の2日間、北海道大学農学部において開催され、99名（一般78名、学生21名）の参加があった。初日に第225回の談話会が開催され「植物病害防除の新局面・スマート農業の可能性」と題して、4名の方にご講演いただいた。以下タイトルと演者を紹介する。「ドローン画像による馬鈴薯の疫病やウイルス感染株検出の取り組み」（杉浦 綾氏）、「AIを利用したリモートセンシングによるオイルパームの病害診断」（谷 宏氏）、「健康診断に基づく土壌病害管理（ヘソディム）」の普及の現状と課題（對馬誠也氏）そして「簡易な観測によるテンサイ褐斑病の防除支援」（鮫島良次氏）。植物の病害診断にもAIが応用される時代になったことを痛感する有意義な談話会であった。とりわけ、圃場で発生したウイルス病を90%にせまる確率で、AIによる診断が可能になったという話は、圧巻であり驚きであった。2日目の一般講演では、20題の発表があり、うちわけは菌類病が13題、ウイルス・ウイロイド病が7題であった。来年度の北海道部会は、平成31年10月17日～18日の2日間、「かでの2.7」において開催予定である。（増田 税）

(2) 東北部会

平成30年度日本植物病理学会東北部会は、9月27日、28日に、山形テルサ（山形市）にて開催され、一般50名、学生32名（合計82名）の参加があった。講演発表は、糸状菌病11題、ウイルス・ウイロイド病11題、細菌・ファイトプラズマ病1題、植物保護4題の合計27題であり、活発な議論と情報交換がなされた（写真1）。幹事会・総会では次年度部会長に山形大学農学部の長谷修氏が選出された。また、本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、岩手県病害虫防除所の猫塚修一氏に授与された（写

真2）。初日の一般講演後に山形テルサにて開催された懇親会では、63名の参加者により活発な情報交換がなされ、大いに親睦が深められた。平成31年度は秋田県での開催が予定されている。（小林 隆）



写真1 東北部会の講演の様子



写真2 東北部会地域貢献賞授与の様子

(3) 関東部会

平成30年度日本植物病理学会関東部会は、9月27日(木)、28日(金)の2日間にわたり、東京大学弥生講堂(東京都文京区)の一条ホールで開催された。参加者は、名誉・永年会員3名、一般会員77名、学生85名(合計165名)であった。講演題数は37題で、その内訳は菌類病関係13題、ウイルス・ウイロイド病関係8題、細菌・ファイトプラズマ病関係7題、植物保護関係9題であった。各講演の質疑応答も活発に行われ、盛況であった。また、27日の午後には、特別講演として、東京大学農学生命科学研究科の市川和規氏に「植物医師の社会的役割」の演題でご講演いただき、技術士(農業・植物保護)の中から審査・認定される「植物医師」が果たしている社会的役割の現状と将来について内容の濃い紹介があり、大変好評であった。懇親会は、同会場アネックスのセイホクギャラリーにおいて行われ、名誉会員渡辺實氏の乾杯のご発声ではじまり、和やかな中にも活発な議論・情報交換が行われた。28日の一般講演終了後には同会場において第13回若手の会が開催され、大いに盛り上がった。平成31年度も東京大学での開催が予定されている。(宇垣正志)

(4) 関西部会

平成30年度日本植物病理学会関西部会は、9月27日・28日の2日間、山口県山口市の山口大学吉田キャンパスにおいて開催された。豪雨や地震の影響で参加者の減少が懸念されたが、212名の参加があり、盛会となった。一般講演に先立ち、役員会および総会において次期部会長に岡山大学の一瀬勇規氏が選出された旨報告があり、承認された。また、次年度の部会は、平成31年9月19日・20日に滋賀県立大学において開催されることが決定された。総会終了後には、今年度部会長の土佐による部会長講演「コ



写真3 関西部会の講演の様子



写真4 関西部会の会場となった山口大学吉田キャンパス

ムギいもち病菌の進化機構」が行われた。引き続いて、一般講演が3会場に分かれて行われ、活発な質疑応答が交わされた。講演の内訳は感染生理44題、分類・同定・診断9題、発生生態5題、防除25題、その他6題の合計89題であった。27日の一般講演後には、同じ会場において情報交換会が開催され、活発な議論となごやかな懇談が行われた。今回の部会は、山口大学伊藤真一開催地委員長、佐々木一紀開催地幹事をはじめ山口県農林総合技術センターおよび協賛団体のご尽力と絶大なるご協力によって成功裏に開催することができた。ここに記して、厚く御礼申し上げる。

(土佐幸雄)

(5) 九州部会

平成30年度日本植物病理学会九州部会は、宮崎市の「宮崎市民プラザ」において、11月7日に第69回講演会(九州病害虫研究会と共催)が、約100名の参加者のもとで盛大に行われた。前日の6日には同会場で第12回病害診断研究会が開催されたこともあり、例年行っているシンポジウムについては開催しなかった。一般講演はウイルス病関連6題、細菌病関連6題、菌類病関連15題、植物保護関連2題の合計29題(内3題は九州病害虫研究会単独講演)で、活発な質疑応答が行われた。今回は学生による発表が多く、半数以上の15課題が発表された。合わせて企画された平成29年度受賞講演では、地域貢献賞の松尾和敏氏(長崎県立農業大学校)から「暖地における特産野菜類病害の生態解明と防除技術確立」について講演があった。なお地域奨励賞の澤岨哲也氏(沖縄県農業研究センター)の「マンゴー病害(炭疽病および軸腐病)の発生生態と防除に関する研究」については、昨年度のシンポジウムにおいて同内容での発表があったため受賞講演は行わなかった。幹事会では、部会役員交代・選出、庶務会計報告、平成

30年度九州部会賞授賞者等について審議された。総会では、次期部会長として九州大学大学院農学研究院の古屋成人氏が承認され、地域貢献賞は河野伸二氏（沖縄県農業研究センター）、学生優秀発表賞は大迫佳奈氏（九州大院農）の各氏が受賞された。最後に部会開催にご尽力いただいた宮崎県始め関係各位に厚くお礼申し上げる。次回は大分県大分市で開催される予定である。（吉松英明）

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) EBC 研究会ワークショップ 2018

平成30年9月19日10:00~17:00, EBC研究会ワークショップ2018（第14回）が、東京大学農学部1号館2階8番教室（文京区弥生）で116名という多数の有料入場者を得て開催された。

午前中は招待講演として果樹病害の防除に関する2題が取り上げられた。まず九州沖縄農研センターの根角博久氏による「カンキツの栽培管理ナビゲーションの実現を目指して」と題した講演が行われ、科学的エビデンスに基づいての栽培管理PDCAサイクルにより、農地環境推定システムの活用を行い、種々の発病要因を推定することによって病虫害防除に対処していくとの話題が紹介された。AI活用が叫ばれる中、正しいデータに基づく病虫害防除の推進が期待される講演であった。次いで青森県産業技術センターりんご研究所の赤平和也氏から「青森県におけるリンゴ黒星病の新防除体系とその評価」と題し、近年問題となったDMI剤抵抗性黒星病菌への対策が紹介された。耐性菌の問題は多くの作物において極めて深刻であり、これに先進的に取り組んだ内容は多くの示唆を含むものであった。

午後からは西日本農業研究センターの川口章氏による「病害の伝染源解明のための空間分布解析について」との講演が行われ、伝染源推定を行うための空間分布解析についての手法の説明が行われた。初心者にとってはデータをどう集めてどう解析していくかは非常に重要であるが、なかなか踏み込みにくい部分であるが、川口氏の噛んで含めるような説明が印象的であった。次いで中央農業研究センターの芦澤武人氏から「イネ稲こうじ病の防除技術におけるパラダイムシフト—イネ体に感染した菌ではなく土壌中の厚壁胞子をたたく—」と題し、従来考えられていたことと異なる知見を得たところから、新たな視点による防除法の開発経緯に関する非常に興味深い講演が行われた。

休憩をはさんでのショートトークでは、主に土壌病害への対策についての講演が行われた。群馬県農政部技術支援課の池田健太郎氏から「土壌中の *Verticillium* 属菌の菌密度測定法の開発と発病の評価への課題」と題し、防除困難

な土壌病害防除へのアプローチ法が示された。2題目の講演はアグロカネシヨウ(株)の美野光哉氏による「アグロカネシヨウが実施している土壌病害の生物性診断について」との講演で、農研機構から提唱された HeSoDiM に基づく土壌診断とその後の対処法についての説明が行われた。最後の講演は石原産業(株)中央研究所の福森庸平氏による「新規SDHI剤ケンジャフロアブルの基本特性と上手な使い方」と題し、新規殺菌剤の特性と使用方法が説明された。

以上の講演が終了した後、川口章氏を座長として総合討論が行われた。今回もそうであったが、これまでのワークショップにおいても、各講演終了後に活発な意見交換等が行われるのが本研究会の特徴であったところ、さらに最後に全体を取りまとめた総合討論実施の試みは比較的希である。今回は川口氏の誘導により、これまで以上に突っ込んだ形での討論が進められ、次回以降に向けてのワークショップの方向性も示される良い機会が得られた。

以上、本年は7題の講演を行うとともに、総合討論の時間を設け、参集された関係者に対して多くの興味深い情報を提供できたものとする。このような中、講演に快く応じて下さった講師の皆様は大いに熱のこもった話題を提供され、聴講者との間で例年通り熱心な質疑応答が繰り返されることとなった。本年はここ数年の間では最大と思われる参加者が得られ、開催する側として非常にうれしい思いがあったことは言うまでもないが、比較的若い人たちの参加が多いことが特徴の本研究会において、特に本年は学生の参加者が8名を数えたことは注目に値し、今後の本研究会の発展が期待される源となると思われた。例年のことではあるが、本年の成功は、ワークショップ実施に際して快く講師を務めていただいた皆さんや運営に協力を惜しまなかった委員諸氏の大きな協力のたまものであったことを記し、ここに感謝の意を表することとする。

なお、昨年来会場を提供にご尽力して下さったが東京大学の山次先生には大変お世話になった。この会場がEBC研究会発展の新たな拠点となることを念じ、謝辞とともに今回の報告を閉じることとする。（根岸寛光）

(2) 第12回植物病害診断研究会

第12回植物病害診断研究会は、平成30年11月6日に宮崎市の宮崎市民プラザで開催された。大都市圏から遠く離れた宮崎での開催ということで参加者の減少が懸念されたが、関係者の努力により90名（会員60名・非会員30名）が参加した。参加者の所属別内訳は、大学28名、農研機構6名、都道府県農試33名、農業改良普及センター5名、企業10名、その他団体8名であり、植物病害診断に



写真5 植物病害診断研究会の講演の様子

関連する方々の参加が多く見受けられた。研究会では、7名の演者による講演と総合討論が行われた(写真5)。第一セッションの「植物病害診断研究のフロントライン」では、農研機構・九州沖縄農業研究センターの富高保弘氏から「野菜類および花き類におけるウイルス病の診断」と題して、メロン、ピーマン、ランタンキュラス等、九州地域で生産が盛んな品目における感染ウイルスの特異的検出技術について講演いただいた。佐賀大学農学部草場基章氏からは「タマネギベと病菌の生態解明に向けた実験手法」と題して、近年各地で多発しているタマネギベと病の病原菌の卵胞子の取り扱い法に関する最新の知見や技術について講演いただいた。岐阜大学流域圏科学研究センターの景山幸二氏からは「疫病菌の同定と検出」と題して、*Phytophthora* 属菌の分離、同定ならびに検出法に関する最新知見について講演いただいた。第二セッションの「特別講演」では、宮崎大学農学部獣医学科の上村涼子氏から「家畜における感染症の診断と対策 ～*Mycoplasma bovis* 感染症を中心に～」と題して、家畜の感染症の概説とともにご専門の *M. bovis* 感染症の診断と対策について講演いただいた。日本植物医科学協会の難波成任氏からは「植物医科学の社会実装にいま必要なキードライバーとは」と題して、植物医科学の社会実装を進めるための人材・ネットワーク・社会的理解の深化について講演いただいた。第三セッションの「植物病害診断の社会実装」では、宮崎県総合農業試験場の櫛間義幸氏から「宮崎県における植物病害診断の実際 ～早期発見と迅速な対応を目指して～」と題して、宮崎県における植物病害診断の流れと開発した改良 DIBA 法キットについて講演いただいた。ベジタリア株式会社若山健二氏からは「根こぶ病菌密度測定サービスの社会実装」と題して、

アブラナ科作物の根こぶ病菌に関する土壌診断の概況および休眠胞子の DNA を利用した LAMP 法による菌密度測定サービスの社会実装について講演いただいた。

総合討論では、法政大学生命科学部の濱本宏氏の司会のもとで、演者をパネラーとして、病害診断における創意・工夫、今後の人材育成・診断体制の強化および病害診断業務の社会実装の確立等について議論した。研究会の運営にあたっては、宮崎県総合農業試験場、宮崎大学ならびに南九州大学の植物病理学研究室の皆様にご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げる。なお、第13回研究会は平成31年11月に兵庫県で開催される予定である。(竹下 稔)

(3) 第29回土壌伝染病談話会報告

本年は、台風、洪水、地震など広範な地域で災害が頻発し、北海道でも台風21号による風水害、直後の北海道胆振東部地震と大規模停電による被害を受けました。その傷が癒えぬなか、10月17日午後札幌市(北海道大学農学部)で第29回土壌伝染病談話会が開催されました。全国各地の企業、都道府県や国立研究開発法人の機関および大学で土壌伝染病に携わる方々45名が参加しました。

今回のテーマは、「北海道における最近の話題から」として、次の講演がありました。

1. 北海道におけるジャガイモシロシストセンチュウの発生と根絶に向けた防除対策について(農研機構 北海道農業研究センター 奈良部 孝氏)
2. *Aspergillus versicolor* Im6-50 株を用いたジャガイモ粉状そうか病の生物防除(農研機構 北海道農業研究センター 中山尊登氏)
3. ジャガイモ疫病菌による塊茎腐敗の発生と土壌中の疫病菌密度との関係(北海道大学大学院 農学院 大澤 央氏)
4. 北海道におけるコムギ萎縮病の発生と抵抗性育種(道総研 中央農業試験場 鈴木孝子氏)
5. 北海道の軟白ねぎにおける黒腐菌核病の防除対策(道総研 上川農業試験場 新村昭憲氏)

はじめの3題はジャガイモの病害についての話題です。ジャガイモシロシストセンチュウは、2015年に北海道の一部地域で検出され、現地での土壌燻蒸処理と対抗植物栽培を組み合わせた防除が実施されてきました。講演1では、線虫密度低減調査によりその効果が実証されたことが示されました。講演2では、ジャガイモ粉状そうか病の生物防除法開発にあたり、拮抗糸状菌の宿主根圏における定着性を期待し、本病発生圃場の土壌や娘いもからの分離を重視する研究戦略が紹介されました。また、講演3では、収穫

時の塊茎表面に生じた傷と付着した土壤中の疫病菌が、貯蔵中の塊茎腐敗の発生要因であることを明らかにしました。これに加え、土壤中の疫病菌密度を推定する定量PCR法も紹介されました。

講演4では、DNAマーカー開発によるコムギ縞萎縮病抵抗性育種の効率化の事例が紹介され、さらに育成した抵抗性品種の根圏におけるウイルス増殖抑制能力の可能性が示唆されました。最後に講演5では、ネギ黒根腐菌核病の発病が地温に依存することから、低温期には遮光資材の選択により地温を上昇させることで薬剤防除と同等に被害を抑制できることが示されました。

講演後には熱心な質問、討論が行われ、半日という短い時間でしたが充実した談話会になったと思います。引き続き行われた情報交換会でも、演者の方々と議論が尽きませんでした。最後に、次回第30回の談話会は、千葉大学の宍戸先生が開催地委員長として開催することを確認してお開きとしました。(近藤則夫)

3. 学生会員交換事業報告

日本植物病理学会／オーストララシアン植物病理学会間の協定に基づく学生会員交換事業

The Australian National University で学んだこと

日本植物病理学会 (PSJ) とオーストララシアン植物病理学会 Australasian Plant Pathology Society (APPS) は、相互の理解と交流のために、2011年より学生会員の交換事業を実施しています。私は本事業の派遣員として承認を頂き、オーストラリアのキャンベラにある The Australian National University (以下 ANU) に11月12日から23日までの12日間滞在致しましたので報告します。

ANUはキャンベラの郊外に位置しており、キャンベラ中心部の国会議事堂、美しい景観を作り出しているパーリーグリフィン湖やオーストラリア原産のユニークな植物がみられるオーストラリア国立植物園などキャンベラを代表する場所へのアクセスが大変良く、都市と自然が共存するとても恵まれた環境にあります。またANUはオーストラリアで唯一の国立大学であり、QS World University Ranking 2016-2017では22位と、世界的にもとてもレベルが高い大学です。本事業では Research School of Biology の David A. Jones 博士の研究室が受け入れて下さいました。

Jones 博士の研究室ではトマトなどのナス科植物による Avr 因子の認識を介した病害抵抗性機構の解明や、アマさび病菌の Avr 因子の機能解析などをテーマとしています。実験に使用する植物や対象としている病害抵抗性機構など、私の研究テーマと関連している部分があるため、Jones



写真6 Dr. Jones と、樹木園 National Arboretum Canberra にて



写真7 Jones lab の皆さん

博士や学生と交流出来ることを大変楽しみにしていました。私が訪問した時は D2 が 1 人と D1 の学生が 2 人おり、毎日積極的に実験を行っていました。私の滞在期間中の活動内容は、自分の研究発表、実験とその見学、キャンベラ郊外の自然保護区の見学、学内の学会への参加です。これらの活動を通じて、ANUの素晴らしい特徴と自身の課題を見つけることが出来ました。それは、大学内において日常的に学生、教員間の交流が行われており、効果的な情報のやり取りやモチベーションの維持につながっているということです。そのような環境のおかげで、私の場合も、訪問先の研究室の学生との交流にとどまらず、他の研究室の学生、先生と情報交換をするなど、交流の幅がどんどん広がりました。しかし背景が異なる様々な人とコミュニケーションしていく中で、自分の力不足を感じる場面もありました。今後、あらゆる交流の場において良好な関係を築き



写真8 実験室とオフィスとの間の通路

自分の研究の糧としていくためにも、自分の英語力をつけ、専門性と幅広い知識の両方を持ちたいと思いました。以下に上記のように思った理由となる具体的な活動内容をお伝えしたいと思います。

まず滞在先の研究室がある ANU 内の Linnaeus Building を訪れて驚いたこと、それは建物が新しく、設備が大変整っているということでした。例えば、実験室とオフィスの間には、通路があり入室にはカードキーが必要です。実験室から出る際には、まず実験室の扉を開けて通路に出ます。そこで白衣を脱ぎ、手を洗ってからでないとならぬオフィスには戻れないようになっていました。その他にも危険試薬を保管する専用の倉庫やオートクレーブ専用の部屋と施設、植物を育てる大きなガラス室等があり、安全に対する意識の高さに驚きました。フロアの人々の雰囲気にも驚きました。それはすれ違う人と必ずと言っていいほど親しくあいさつをすることです。訪問先の研究室の学生もとても親切で会ったばかりの私に学内の近道を教えてくれたり、徒歩 15 分ほどにある最寄りのスーパーマーケットまで案内してくれたりしました。

私の研究発表は研究室内で行いました。発表中は Jones 博士に多くの指摘を頂きました。英語での議論には苦労しましたが、自分の足りない部分に気付くことが出来ました。発表後は、私の研究に関連しそうな研究室の先生やポスドクを紹介して頂き、議論をさせて頂いたことで今後の研究を進めるにあたって重要なヒントを得ることが出来ました。

実験では、研究室の学生とベンサミアナを用いてアグロインフィルトレーションによる一過的な過剰発現をしました。私もその実験を頻繁に行うのですが、細かな方法が違って、自分の方法が当たり前のことではないと認識し、自分のやり方を見つめなおすきっかけになりました。SDS-PAGE

を見学した際には、初めて SDS-PAGE を行う学生に対し、オーストラリア連邦科学産業研究機構 (CSIRO) での勤務経験がある熟練したポスドクの方が各手順と試薬の意味等、丁寧に指導をされていました。その姿を見て自分もそのような細かい指導が出来るくらい一つ一つの実験操作を理解していきたいと感じました。

実験以外でも Jones 博士には植物園を案内して頂いたり、研究室旅行として研究室の学生さんも一緒にキャンベラから車で 40 分ほどにある Tidbinbilla 自然保護区に連れて行って頂いたりしました。野生のワラビーやカンガルー、キバタンを初めて見る事が出来るとも貴重な体験だっただけではなく、散策や野外での BBQ を通じて学生さんと密にコミュニケーションをとることが出来たため大変面白かったです。学生さんたちは、皆アジアの国出身で自国の食文化や宗教についてとても分かりやすく教えてくれました。学生さんたちは日本文化にも興味を持っており、たくさん質問をしてくれたので大変嬉しかったです。中には、日本の長寿の秘訣に関する本を読んでいる学生もおり驚きました。

滞在中は、訪問先以外の研究室の学生さんたちと交流できる機会がありました。例えば、毎週木曜の“Morning tea”です。この時間は植物病理に関連する研究室の学生が飲み物を持って参加し、各自が持ち寄ったお菓子などを食べ飲み談します。Morning tea では、初対面の私に対してもウェルカムな雰囲気でした。驚いたことに、他の研究室においても様々な国籍の学生がいて、話をしてみると、多くのポスドクやドクターの学生として、オーストラリア以外の国から ANU に来たばかりの方が沢山在籍しているということが分かりました。国籍が違っても初対面でも、温かく受け入れる雰囲気が過ごしやすく、とても良いと思いました。

最終日は“Research School of Biology HDR Conference”に参加しました。この会は年に一度ドクターの学生が、学内で研究発表をする場です。驚いたのは、学生のプレゼンテーション能力の高さです。スライドの完成度、聴衆に分かりやすく伝える力、質疑応答での受け答えなどすべて私から見てハイレベルでした。休憩時にはロビーに用意された多くのお茶やお菓子を食べながら、とても活発な議論がいたるところで行われていました。私も研究室の学生と行動を共にしながら、他の研究室の学生さんと自分の研究内容を話す機会を持つことが出来ました。また、ある女性研究者は私の研究内容へのアドバイスだけでなく、ご自身のこれまでの経歴、研究や将来についての考えなどを熱心に話してくれました。自分は、修士課程修了後は博士課程に進学したいと考えているので、海外において経験が豊富

な女性研究者のお話を聞くことは大変貴重な機会となりました。

訪問前は、限られた時間の中で研究室の学生や先生と出来るだけ情報交換したいと思っていましたが、行ってみるとその交流の幅がどんどん広がって、想像していた以上に沢山の方とお話することが出来ました。このように多くの交流が出来たのは、ANU内で気軽に情報交換できるような雰囲気、環境があったおかげであると感じました。例えば、私のいたフロアにはオフィス間の壁や扉がなく学生が自由に他の研究室の学生の様子を見たり、お互いに話したり出来る環境がありました。物理的な壁がないだけでもコミュニケーションのしやすさが生まれると思いました。また留学生が多いことで多様な考えや文化を受け入れる雰囲気があり、そのことによってさらに世界中から学生が集まり、色々な背景を持つ人と話すことで新しいアイデアにつながるのではないかと思います。

私がこのプログラムに申請した目的は、研究者になるという目標のために海外の研究機関の取り組みかたを知り積極的にコミュニケーションを行う姿勢を養いたかったからです。ANUでは国際色豊かな学生間でたくさんの交流の機会があることを知りました。そのような環境で12日間過ごす中で、自分からアクションを起こす度胸も磨かれました。今後、考えを英語で話す場面や研究内容を伝える場面で、自分の力を発揮できるように、日ごろから色々な人とコミュニケーションをとることを意識し、様々なことに挑戦していきたいです。以上のような数えきれないほどの貴重な体験が、幼少の頃からの憧れであったオーストラリアで出来たことに大変喜びを感じております。本事業への応募の機会を頂きました指導教員の竹本先生に深くお礼申し上げます。最後になりましたが、本事業で大変お世話になりました。PSJの夏秋啓子先生ならびに訪問先のThe Australian National UniversityのDavid A. Jones博士、研究室の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(名古屋大学大学院生命農学研究科 今野沙弥香)

【会員の関連学会等における受章のお知らせ】

松下 陽介氏（農業・食品産業技術総合研究機構 野菜花き研究部門）が、第17回（平成30年度）日本農学進歩賞を受賞されました。日本農学進歩賞は、農林水産業およびその関連産業の発展に資する農学の進歩に顕著な貢献をした優秀な若手研究者を顕彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は「園芸作物に感染するウィロイドの生物学的特性に関する研究」です。

渡邊 健氏（茨城県農業総合センター 農業研究所長）が、平成30年度農林水産省農林水産技術会議会長賞を受賞されました。農林水産省農林水産技術会議会長賞は、農業その他関連産業に関する研究開発の一層の発展及び農業技術者の意欲向上に資するため、農業技術の研究や普及指導などに顕著な功績があった者を表彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は「難防除土壌病害の環境保全型防除技術の開発」です。

岩館 康哉氏（岩手県農業研究センター 環境部病理昆虫研究室 主査専門研究員）が、平成30年度（第14回）「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。本賞は、農林水産業及び関連産業に関する研究開発の一層の発展及び研究開発に従事する若手研究者の研究意欲の一層の向上を図るため、優れた功績をあげた若手研究者を表彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は「キュウリホモブシス根腐病の総合防除対策の確立」です。

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、大島研郎、鈴木文彦、池田健太郎、染谷信孝

編集後記

新年おめでとうございます。新年にあたり、会員皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りします。

学会ニュース第85号をお届けします。本号は、部会の開催報告と研究会・談話会の開催報告を中心に掲載しました。

北海道、東北、関東、関西、九州、いずれの部会も参加者多数で盛會裡に開催されました。北海道部会では「植物病害防除の新局面・スマート農業の可能性」として、植物病害診断へのAIの応用についての談話会が、関東部会では「植物医師の社会的役割」、関西部会では「コムギいもち病菌の進化機構」として、植物医師の現状と将来や興味深い研究成果をテーマに特別講演が行われています。一般講演での活発な質疑応答とともに談話会や特別講演でも有

益な情報交換が行われたようです。さらに東北部会と九州部会では地域貢献賞等の授与が実施されています。開催にご尽力いただきました関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

EBC 研究会ワークショップが9月に東京大学で、植物病害診断研究会が11月に宮崎市の宮崎市民プラザで、土壌伝染病談話会が10月に北海道大学で行われました。多くの方が参加され、興味深い講演と話題提供を受けて熱心な質疑応答、討論が行われたようです。会の開催や運営にご尽力いただきました関係の皆様、またご参加の皆さまに、学会活性化へのご協力に感謝申し上げます。

オーストラリアン植物病理学会との交流の一環として行われている学生交換事業によって、オーストラリアを訪

問した今野沙弥香さんに訪問記を書いていただきました。今野さんには、この貴重な体験を今後の研究生活に生かし、更なるご活躍を期待します。

昨秋、松下陽介氏が日本農学進歩賞、渡邊健氏が農林水産技術会議会長賞、岩館康哉氏が「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。誠にうれしいお知らせです。おめでとうございます。今後益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

今年も本欄では学会関連の各種多様な情報をご提供したいと思っております。引き続きのご愛読と情報の提供をお願いいたします。

(藤田佳克)
